

「24年の共済活動を振り返って」

インタビュー 坂倉 楓さん (元京滋・奈良地域センター事務局、Sと略)

聞き手 名和又介先生 (京都事業連合理事長、京滋・奈良地域センター会長、Nと略)



専業主婦からの出発

N：坂倉さん、お久しぶりです。共済のことについてお話を伺うのを楽しみにしていました。まずは自己紹介してください。

S：私は専業主婦から京滋北陸共済センターに就職しました、1988年11月のことです。全国連合会の、共済だけをする支所で上司と私の二人だけの小さな事務所でした。その後、京滋北陸共済センターと京滋ブロックと関西地連とが合併しました。みなさん、共済の電話がかかってくるのを怖がって出てくださらなくて、お食事やお手洗いにいっても「楓さん、電話よ～」と呼ばれる毎日でした。始めは3、4時間の電話番だけの仕事というお話で、生協のことも共済のこともまったく未知でした。事務局長さんや学生さんといっしょに働く環境にもび

っくりしました。当時の学生委員長だった齋藤学さんは、今京都府立大学の助教授になられて、いまだに家族ぐるみでお付き合いをさせてもらっています。次の学生委員長は、現在松山大生協の神田専務でした。

はじめは言葉遣いも違うし、お辞儀の仕方ひとつ違い、正直なところ、大学生協とはなんと粗雑なところだろうと思っていました。お辞儀をすると「馬鹿丁寧や！」とけなされ、話すと「お上品ぶっている！」といわれて悲しくなることもありました。

なぜそういう年齢で勤めに出たのかというと、娘の小学校のPTA副会長という大役をおしつけられ、たまたま当番校ということで京都市の会議にも出て、そこでも役をつけられて。そのときお世話になった方が松栄美知先生という方で、京都市で初めて小学校の女性の校長をされた方でした。その方から、「これからの女性はあなたのように家に籠って、子どものことを全部していますという時代ではなくなるのよ」と言われました。それまで私は、子どもの食事はもちろん、おやつも手製、洋服も編み物も自分で作って着せるという生活でした。ところが、松栄先生のことばに初めて目覚めて、仕事を探したのです。短大時代の後輩に「あなたにぴったりの仕事がある」と騙されて勤めだしたのです。生協が何たるかも、なにもわからないままに働きだしました。今となってはだまされたとは思っていませんし、幸せな24年の大学生協時代を送ることができたと思っています。

事務所では、関西地連の大崎事務局長がいろいろと気にかけてくださって、ある日、私の日記帳を見つけて、「へえ、毎日、こんなこと書いているの！」と目を留められました。私は毎日、何時にどんな電話があり、どんな内容だったか、とつけていたのです。大崎さんは全国の会議で「うちのパートさんで、こんなことをしている人がいるのよ」と紹介されたそうです。当時の共済部長の堀江さんがその話に感

動されて、何回目かの全国共済セミナーの席上でその話をして「坂倉さん！いますか？」と言われました。その時は恥ずかしくて隠れていました。そこから京都に来られると呼んでもらってお食事をしたり、「いま、どんなことをしているの？」とか「どう思っているの？」と尋ねてくださいました。大崎さんもうちの娘に平和の話やいろいろと話をしてくださり、娘はお小遣いをためて平和カンパしたりしていました。

父の教え

N：坂倉さんを仕事に駆り立てるものがあったのですか。

S：恥ずかしいのですが、亡くなって55年たっても父親のことが大好きなのです。その父の教えで、「たとえ自分が裕福であっても、幸福不幸というものは動いているもので、不幸な人をばかにしてはいけけないし、恵んであげるといような考えではだめで、不幸な人と一つのを半分にして分け合うように生きてゆくこと、人とはそういうものだよ」と教えてくれました。

N：お父さんは何をされていたのですか。たとえば宗教関係かなにか・・・

S：父は名家の大地主の次男坊で、若いころはやんちゃをしたようです。次男には相続もなにも無くて、神戸大学に学び、自力で商売人になろうと努力したようです。私が15の時に亡くなりました。

N：お父さんの生き方が、坂倉さんの人生に影響しているのですね。

S：夫は室町の帯間屋の次男で、東京日本橋の支店を継いでいたのですが、東京店は閉めて京都の兄といっしょに商売をしていました。私も商売を手伝うものと思っていたようですが、私は一人子で両親の愛情をこれでもかというほど、いっぱい受けて育ち、そういう教えのもとに、自分にあう生き方を求めて働きたいと思っていました。他所で働くとしたことは、私にとってはじめての反抗でした。

大学生協に勤めだし、どんどん共済の仕事に関わるようになって、いままで自分は父を早く亡くしたことが一番辛いことだと思っていたけれど、学生さんや親御さんの事故や病気の話を知ると、親にとって辛いことや苦しいこともある、世間は広いのだということを感じました。同時に私にも何かお役に立つようなことがあるかなあ、私の電話の対応のことで親御さんが元気になれることもあって少しずつ自信をつけていきました。そのうちに関西地連や京滋ブロックの学生さんが私の話を聞きにきてくれ、ひっぱりだしてくれたのです。



です。どんどん勤務時間も延びて、そのうち私の方から学生さんを誘って、単協を訪ねたりしました。北陸の福井大学、富山大学、金沢大学へもでかけ、単協で働くパートさんの相談にのったり、いまは茨城キリスト教大学生協の専務理事で当時ブロックの学生委員で共済担当の海野君と滋賀県立短期大学生協の菊池さんをつないだりするようになりました。人と人をつないだり、相談事に乗ったりすることが楽しくて、私の性格でぴったりだったのですね。上司がコロコロ変わり、辞めたいと思うようなこともありました。そのたびに学生さんが「辞めるな！人生で自分にあう仕事をしている人なんていないよ。悩みながら努力して働いているのだよ」と、4時間もかけて説得してくれたのです。「生き生きと楽しそうに働いているやないか。がんばろうよ！」と。

「人の道を教えてくれた」

N：共済にかかわっての思い出はありますか。

S：京大の学生さんで、卒業を前にして交通事故にあったケースは忘れられません。後部座席に座っていて、シートベルトをしていて、ガードレールに当たって輸血で肝炎になってしまった。三井物産に就職することになっていましたが、就職できなくなった。三井物産側では「養生して会社へきてくれ」といわれ、それを知った時は生協だけでなく民間会社でも、こんなに人情のある配慮をしてくれるものなのだと、とても感動しました。本人は入退院を繰り返して、心身ともに衰弱しきったこともありましたが、会社の上司の励ましや大学生協の御蔭で2年後に就職することができました。ある朝、本人から電話で「ありがとうございました。生涯、坂倉さんのお名前は忘れません」と話してくれました。

N：そういう嬉しいことがあって、思いとどまって共済の仕事が続けられたんですね。

S：私の勤めだした頃は、「あの人、パートのくせに」とか「お見舞い活動しかできない」と言われた時代がありました。最近ではパートも正規も区別なく仕事していると思います。それが24年間で変わった、嬉しいことです。

やはり京大の学生さんで入学直後に交通事故に遭ったというケース。上司と相談しながらお見舞いにいったりしました。こちらは親身な気持ちでお見舞いに行ったのですが、お母様から「お家は何をなさっているのですか」と聞かれ、「呉服屋です」と答えたら、呉服を買わされるんじゃないかというようなことを言われて、ショックだったこともありました。自殺した学生さんのお部屋に行ったり、普通では経験しないようなこともあり、共済って辛い仕事だと思いました。そんなときに私のお見舞い活動が評価されて、全国の共済担当者の相談を受けるようになりました。他地域では理解されるのに、地元では「プライバシーの侵害じゃないか」と言われたりもしました。仏さん（亡くなった父母）の前に何時間も座って自問自答して、「人間なのだから、いろいろある。節度を保ってしっかりやろう」と心にきめたことがありました。

全国共済セミナーの集会で話をしてくれと3回続けて依頼されました。さらに続けて依頼が来たときは、他にも適任者がいらっしゃるからとお断りすると、「坂倉は学生を利用している」と中傷されました。

02年の学生委員の中野くんが「僕たちは楓さんが草の根活動していることを知っているよ」と言ってくれて、「草の根」という言葉を初めて聞いて、しばらく心臓がドキドキするほど感動しました。01年の学生さんは、私の写真集をプレゼントしてくれました。これは私の宝物です。いつも学生さんに助けられ、24年間やってきたと思います。

大崎さんの次の関西地連事務局長の南波さんにも非常に良くしていただきました。中森専務からは「楓さんは、人の道を教えてくれた。それがあったから、今の自分がある」と言ってくれたことが嬉しかったですね。タヌローの絵を描いてくれました。

N：学生さんというのは、利益を度外視して真っ直ぐに見てくれるから彼らの感謝のことばは、本当に励ましになりますね。

S：地域センターの職員になってから、横山事務局長には本当に感謝しているのです。私が話をするときは雨の日でもいつも聞きに来て、



付き合ってくださいました。忘れることができません。

共済は生協の心

一番思い出に残っているのは、京大の学生の竹内悦子さん。お父様からの電話で「助けてほしい」と、泣いておられるようでした。上司の石川葉子さんと一緒に病院へ伺いました。お母様は「給付はダメに決まっている。大学生協も出ないでしょ。帰って！」と人間不信になっておられました。疲れきっておられた。「娘が書いたものを見て欲しい」と言われ、見せられた大学ノートには、『健康がほしい』と書かれてありました。それを見て、私も石川さんも声をあげて大泣きしました。何とかしてあげたいと思って、京大生協にお願いしましたが、「京大の学生は頭がいいから、人情なんぞで気持ちが動くようなことはない。プライバシーの侵害のようなことはできない」と言われたことは、ショックでした。じゃあ、私一人でお見舞いを続けると決めて、お母様にお弁当をもっていたり、洋服を作って差し上げたりすると、徐々に心を開いてくださり、いろいろなお話をするようになりました。悦子さんは一度退院されたのですが、再発して、もう目も見えず、耳も聞こえないほど・・・壮絶でした。お見舞いにゆくと、学生さんと話がしたかったとあって、私に「学校はどこですか」とか「就職はきまりましたか」と聞くのです。私は辛くて辛くて……。その後、危篤に、お葬式には出られませんでした。死亡金の手続きをしに行かなければならないのも辛かったですね。お母さんはお弔いに来ている学生さんたちみんなに「あなた生協に入ってる？ 生協に入ってね、共済に入ってね、入ってね」といわれ、「やっぱり生協は共済なんだ」と思いました。

人と人との関係を大切に

そのあと、京都教育大学3年生の徳永祥二さんの事故受付をしに九州の都城へ行きました。辜丸腫瘍が転移していました。私がお見舞いに行くと元気になると聞いて、一生懸命に入院先の久留米までお見舞いに行きました。久留米出身のブロックの学生委員長をしていた立命館大学の森久くに頼んで、御両親も一緒にお見舞いをしてくださいました。祥二くんは次々と病気が転移して、しまいには頭も支えられないほどでした。ある時、お母さんが博多まで送ってくださる車中で、「祥二に『坂倉さんは余裕があるわね』と話すよ、『お母さん、違うよ。坂倉さんも辛いけれども、懸命にいろいろな話をしてくれるんだよ』」と言われました。ゴメンナサイネ」と。そして、告知すべきかすべきでないか、親としてどうですかと、相談されました。私はなにも言えませんでした。その夜、森久くと夜が明けるまで話し込みました。徳永さんのお見舞いには、ゼミの板東先生や生協理事長の武蔵野先生、宮村専務、海野さん、パートさんも一緒に千羽鶴を折ったりして、応援してくれました。結局、2年3か月の闘病後に亡くなりました。N：みんなで応援したのですね。



S：祥ちゃんが亡くなったときには、みんなが地連の机の上にお悔やみの写真やお花を飾っていただきました。仲間って素晴らしいなあと思いました。

N：実際お見舞いなどでお付き合いするとなると、ご両親との関係なんですね。その中で坂倉さんが姉妹のようにいたわったり相談されたり、人間関係ができたということも共済の素晴らしい点ですね。これから共済に関わる人に、

こんな共済にしたいなど要望がありましたらお聞かせください。

S: 全国の共済センターに対して期待しています。昔は、事故受付も直接していましたから、人との関係を大切にしてきました。今は共済センターが受付してくれるから、難しい話はセンターに任せたらいいと、人との関係も希薄になっていないでしょうか。京大の看護師を目指している学生さんに竹内悦ちゃんの話をしたときは、プライバシーの問題もありますが、当のご本人や学生さんにも丁寧にお話をし、人間は一人では生きていけないことを、大切なものを伝えていくことが大事だと気付きました。横山さんからは「坂倉さんの共済の話は、生協の本髄だ。古い話だからとおっくうにならずみんなに話してほしい」と言ってもらいました。

振り返って24年。いつも、いい学生さんたちに恵まれて、地域センターの立ち上げのときからも、素晴らしい学生さんたちと出会うことができました。去年の秋には、都城の徳永祥二さんのご両親を再びお訪ねしました。この旅行も元学生事務局の中山くんが準備してくれました。

N: 坂倉さんから都城のことを聞いていましたが、今回やっと内容が分かりました。いいお話をありがとうございました！地域センターの文化講座も主宰していただいていますし、ますますお元気で、学生たちを温かく導いてください。

(2010年6月12日インタビュー)